犯罪被害者遺族が経験する他者関係変容のプロセス

－二次被害を与えない支援に求められるもの－

○　大阪府立大学大学院　　林　貴子（8010）

キーワード：犯罪被害者、二次被害、他者関係

１．研 究 目 的

本研究の目的は、犯罪被害者遺族（以下被害者遺族）が経験する被害後の他者関係に着目し、被害後に他者や社会への信頼を失うという他者関係の変容がどのようなプロセスで起こるのかを検討することにある。

被害者遺族が、被害後に受ける影響の一つとして他者や社会への信頼を失うことがこれまで言われてきている。これは、犯罪被害による死別の特徴として①加害者の行為によって生じたことであること、②犯罪が国家の公平や正義にのっとられて裁かれるため、被害者遺族の喪失による悲嘆の大きさとのギャップが大きいこと、③被害者であるにもかかわらず、社会的にスティグマ化され、コミュニティから孤立してしまうことが関連していると考えられている。それにより、被害者遺族の PTSD の発生率が他の死別要因と比較して高いことが報告されている。

被害者を支援する立場の司法関係者や医療関係者、友人知人などがかえって被害者を傷つけてしまうという二次被害の問題は現在の被害者支援における大きな課題の一つである。この二次被害も他者や社会への信頼を失う要因の一つとされている。しかしながらこれまで、被害者遺族が、被害後に経験する他者とのかかわりをどのようにとらえ変容させていったのか、また失われた信頼はその後どのように変容していくのかのプロセスは明らかにされてきていない。他者関係の変容に影響する要因や相互の因果関係などを明らかにすることにより、被害者の望む被害者支援について検討したい。

２．研究の視点および方法

犯罪被害により家族を失った遺族に対して、半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。調査対象者は、加害者のいる犯罪として、殺人・交通事故などの被害者遺族とした。面接では、事件の概要やその後の様子・心情などと共に、他者や社会へのかかわりの様子や変化に焦点を当てて話しを聞いた。ここでの他者とは、自分以外のすべての人たちととらえる。つまり、被害者としてかかわらなければならない医療関係者・警察官・検察官・弁護士などの他、友人・知人・職場の同僚や上司・隣人のみならず、同じ被害者遺族となる家族や親族も対象となると考えた。インタビューデータは、質的分析により現象の相互作用を説明する理論を構築するために、修正版グラウンデッドセオリーアプローチを用いて分析した。分析にあたっては質的研究方法に詳しい研究者より継続的にスーパーバ

イズを受けるとともに、複数の M-GTA 研究会等においてグループスーパービジョンを受けた。

３．倫理的配慮

調査協力依頼に際して、調査協力者に調査の目的・概要・個人情報の守秘などについて書面と口頭で説明し、書面にて同意を得た。また本調査は大阪府立大学人間社会学研究科研究倫理委員会で審査を受け、承認を得た。

４．研 究 結 果

インタビューは 13 名（40 代～60 代）に実施し、面接時間は約 90～200 分であった。分析の結果、被害者遺族が経験する他者関係のプロセスとして、《突然「被害者」になる》、《世の中の人 VS 自分》、《私たちなりに社会とかかわる》の 3 つのコアカテゴリーが導き出された。以下はそのストーリーラインである。(〈　〉表示はカテゴリー)

被害者遺族は「普通の人」から《突然「被害者」になる》。その後被害者遺族としての他者との関係は《世の中の人 VS 自分》と感じるような大きな変化となって現れる。それは元に戻ることはなく《私たちなりに社会とかかわる》ことになり、後の人生を変えていくことになる。《世の中の人 VS 自分》とは、司法に〈立ち向かう〉、社会とのつきあいを〈狭める〉、身内のバランスが〈壊れる〉という３つの異なる他者関係の変化である。被害者遺族はそれぞれに〈立ち向かう〉が多い人、〈狭める〉が多い人などの違いはあるが、誰もが３つの他者関係の変化を経験していた。また司法に〈立ち向かう〉ことは、〈人が魔物に見える〉ようなダメージを被害者遺族に与えていた。《世の中の人 VS 自分》から《私たちなりに社会とかかわる》への変化のプロセスは、わずかにあった〈自分と同じと思える〉人たちの存在が出発点となっていた。〈ありのままで過ごせる〉ような遺族仲間などとの交流を通して、自分が〈現在形のままの苦しみを抱える〉しかないことを知り、社会で〈仮面を使い分ける〉こととのバランスをとって《私たちなりに社会とかかわる》ようになっていくのである。

５．考 察

「普通の人」から《突然「被害者」になる》ことで、被害者遺族にとっての他者の種類や機能は大きく変わっていった。家族を亡くした悲嘆と共に、《世の中の人 VS 自分》という他者関係の変容は、被害者遺族にとっては大きな負担となり、他者や社会への信用を失うことに直結する経験であるととらえられる。一方〈自分と同じと思える〉人々の存在は、悲しみや辛さを共有できるものであるとともに、《私たちなりに社会とかかわる》という、被害者であり続けながら社会で適応していくための原動力となっていた。本研究ではこれまで考えられていた被害者遺族が他者や社会への信用を失うという現象をより構造的にとらえることができ、またそれがどのような因果関係をともなって《私たちなりに社会とかかわる》という変化に結びつくのかを明らかにできた。適切な場面での適切な被害者支援を考える示唆となったと考える。